

## 朝鮮民主主義人民共和国の印象

——学習重視の生活——



暑い夏の日であった。コバルト・ブルーの  
絵具をといて描いたような、まじりけのな  
い、すみきった空がひろがっていた。その下  
では、照りつける太陽の光をあびて、ヤナ  
ギ、ポプラ、アカシヤの木立が深みどりの  
かげをおとしていた。空の色におとらず、み  
どりもまた、いきいきとすんでいた。町のい  
たるところで、花壇のカンナとサルビアがは  
でないろどりをそえていた。暑い日だとい  
うのに、大気は意外にさわやかであった。

昨年夏、関西学術交流訪朝団の一員として

訪れた朝鮮民主主義人民共和国の首都ピョ  
ンヤンに第一歩を印したときの、印象である。

朝鮮民主主義人民共和国と日本とは、まだ  
正常に国交を開いていない。国交の開かれて  
いない国を訪れるには、やっかいな旅程を覚  
悟しなければならぬ。わたしちも東京から  
いったんモスクワに飛び、そこに駐在する共  
和国大使館で入国査証を受け、飛行機をのり  
かえてピョンヤンにひきかえすコースをとら  
なければならなかった。日本からピョンヤン  
に直接飛ぶことができたなら、わずか二時間あ  
まりで達するところを、じつに延べ二十四時  
間をこえる、まったくうんざりするほど長い

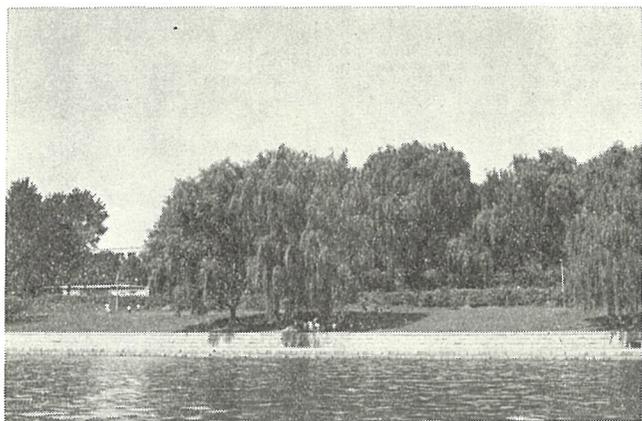
岡

満

男

空の旅であった。たいへんな遠回りである。  
しかし、さわやかな大気につつまれた風景  
は、長い空の旅につかれたからだをたちまち  
いやしてくれた。

人々の表情は、さわやかな大気がただよう  
ふんいきにふさわしく、しごくのんびりした  
ものであった。いらいらあくせくといった表  
情など、どこにも見られなかった。しかし、  
のんびりした表情のなかに、国家建設にたい  
する静かな活気が脈打っていた。人々は三十  
六年間にわたった日本の植民地時代に、しい  
たげられつづけてきたうえに、解放後まもな  
い時期に三年余におよぶ朝鮮戦争で全土が焼



大同江岸のヤナギの木立。

土化する苦難を経験した。かさねがさねの悲劇は、かえって強い民族の団結を生んだとい  
ってよい。民族の団結は大きなエネルギーと

なって、朝鮮戦争後今日までの二十年余のあいだに、国家建設を軌道にのせることに成功した。のんびりした表情は、国家建設を軌道にのせることに成功し、人民の生活が安定したゆとりを思わせた。

短い年月のあいだに国家建設を軌道にのせることができたのは、なによりもキム・イルソン国家主席という、すぐれた指導者におうところが大きい。国家建設はひたすらキム・イルソン路線に結集してきたといつてよい。わたしたちが見学に訪れた工場でも、農場でも、学校でも、主席の現地指導を受けた回数  
を語り、ほこりとしているようであった。職場にも、教室にも、主席の肖像がかかげられ、ピョンヤンの中心部の丘の上にある革命博物館の前庭には高さ二十メートルの銅像が金色にかがやいていた。ピョンヤンの市民たちは、朝夕銅像の主席をおおいでいるわけである。また石油をのぞく地下資源を産出し、一千五百万の人口と資源とのバランスにひじようにめぐまれていることも見のがせない点  
だろう。地下資源にめぐまれていることは、国家建設のための産業振興にとつて、いわば

天与の好条件である。だが、どんなにすぐれた指導者とゆたかな地下資源にめぐまれていても、民族の団結なしに国家建設を軌道にのせることは至難にちがいない。短い年月のあいだに国家建設を軌道にのせることに成功したのは、民族の団結の成果だといつてもいい  
すぎではあるまい。

民族の団結とともに注目されたのは、学習重視の政策であった。学習重視の政策は、人民総インテリ化政策とよんでもいいだろう。キム・イルソン国家主席がひきいる朝鮮労働党は、社会主義建設の中核だが、そのマークは中央にインテリを象徴する筆をたて、左右に労働者を象徴するハンマーと農民を象徴するカマとをくみあわせている。つまり国家建設にはたすきノントリの役割に、ひじょうな重きをおいているといつてよい。こうした党の姿勢を反映して、小学校に相当する人民学校から大学にいたるまで教育施設、学習環境は、現在この国があたえうるベストの条件で整備されている。たとえば、義務教育の人民学校四年、高等中学校六年の計十年間は、教科書のほか学用品、制服まで無償で支給さ



ピョンヤン市内の労働者アパート。一階が商店街になっている。

れ、学業専一ではたらくことはいつさゆゆるされない。また大学は全国に百四十をかね、大工場などには、労働者のための夜間大学が付設されている。

しかし、日本の植民地時代、朝鮮半島の北部には医専があったぐらいで、大学の母体になるような教育施設は皆無にひとしかった。このため解放後の大学建設は、文字どおり白紙の状態からのスタートであった。まずキム・イルソン国家主席が各地に住むインテリに直接手紙を送って、大学建設への参加協力を要請することからはじまった。要請にこたえて、六十余人のインテリたちがピョンヤンに集まり、一九四六年九月一日、キム・イルソン総合大学の開学にこぎつけたのであった。現在副学長をつとめるチ・チャンイク博士も、そのとき主席の要請に応じた六十余人のなかの一人である。

こうして生まれたキム・イルソン総合大学は、朝鮮戦争のはげしい攻防がくりかえされたさなかでも、中絶することなく、疎開先で学習・研究生活をつづけたという。

大学建設にたいするスタッフ、学生たちの情熱が強いささえとなったのだろう。苦難の試験をへて、今日のキム・イルソン総合大学は、共和国の最高学府としていていさいとをたえている。社会科学系が法学、経済、哲学、歴史、朝鮮語文学、外国語文学の六学部、自然科学系が数学力学、物理、化学、生物、地質、地理の六学部、あわせて十二学部である。学生は昼間一万二千、夜間および通信教育六千をかぞえている。ベトナムをはじめアフリカ、東欧諸国からの留学生もすくなくない。

毎年入学試験は他の大学にさきがけておこなわれ、高等中学校を優秀な成績で卒業し、その地区の社会主義労働青年同盟など社会団体の推薦を受けた者だけが受験することができるが、たいへんな難関を描くそうだ。だからキム・イルソン総合大学の学生は、学生のなかでも、とりわけエリートである。わたしたちが訪れたときは、ちょうど夏休み中だったが、付属図書館や理科系の実験室で熱心に研究をつづける学生の姿がめだつた。キム・イルソン総合大学の学生にかぎらず、この国の学生は、じつによく学習する印象を受けた。

学習するのは学生ばかりではない。大臣や次官級の政府幹部になっても、毎年一カ月、人民経済大学の寄宿舎にはいり、学習生活をおくらなければならぬ。人民経済大学は朝鮮労働党中央委員会直轄のもともと党幹部養成の教育機関だが、党幹部の再教育機関の役割もなっているわけである。総理大臣以下の幹部は、この学習生活を通じて、あたまたのマンネリ化を防ぎ、ひいては政治の硬直化を防いでいるといっているだろう。それにしても、キム・イルソン国家主席と二人の副主席をのぞく幹部のすべてに学習生活を課しているのは、ずいぶん思いついたことである。おそらく他の国に類例のない共和国の特色ではないだろうか。

もちろん一般の労働者や農民も、日々の生活のなかで学習タイムをもたなければならぬ。また職場でも、軍隊でも、学校でも、毎朝授業のはじまる前のひととき、その朝の新聞の論説、重要記事を一人が読みあげ、みんなで討論するのが日課である。だから、朝、新聞を読まなかったり、見出しだけ目をとおしていで出勤するというわけにはいかな

い。みんな熱心な読者である。この点、新聞は内外のできごとをつたえるというよりも、人民を国家建設に導くための教科書といえる。

以上が朝鮮民主主義人民共和国の印象の一端である。今後なお克服をせまられる課題は、すくなくないが、

大学にとつて第一の課題は、いかにして国際交流の道を開くか、ということだろう。また学習重視は、政治の硬直化を防ぐばかりでなく、人々の結束を高め、生活の日常化にながれがちな弊害をいとめる点で、けっこうなことにはちがいない。ただ勉強がらいな人間にとつては、たいへん苦痛の日々だろう。勉強がらいな人間は共和国にもいるはずであ

る。そうした人間がどんな日々をすごしているのか、いささかげすのかんぐりめいた興味をそられたが、もちろん知る機会はえられなかった。

(大学文学部教授・新聞学原論)



ピョンヤンの革命博物館の前にたつ高さ二十メートルのキム・イルソン国家主席の銅像。

## 最近の中国



河 崎 洋 子

二月二十五日から三週間、日本YWCA代表として第二回日中友好婦人訪中団の一員として中国を訪れることができました。

航空協定の締結がなかなか進行しないために、香港に一時泊して中国領に入りました。訪れたのは北京、南京、無錫、上海、広州の五つの都市でしたが、そのいずれの地でも誠心のもちった歓迎を受けました。

もちろん限られた場所、限られた期間の訪

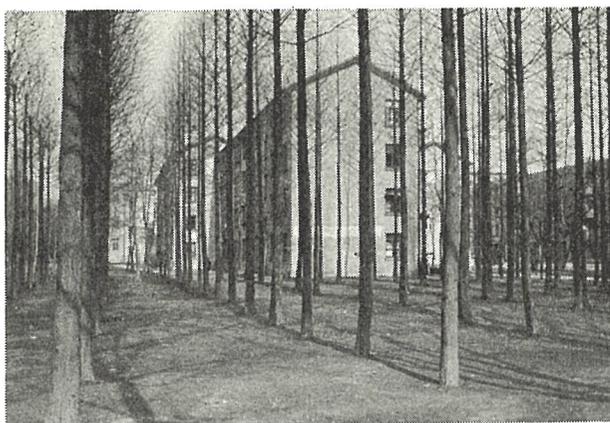
問ですから広大な中国の全貌を語ることは不可能ですが、人びとの顔の明るさには目をみはる思いをしました。

可能な限り自分の目で新中国の実情をたしかめたいと願い、私たちは実に欲張った希望をのべて、人民公社はもちろんのこと、学校・工場・病院・市場・療養院・託児所・地下壕・幹部学校からホテルの調理場や家庭の中心まで見学訪問し、家庭主婦や身障労働者、解放前乞食をしていたという老人、プロレタリア文化大革命の時現場からの批判を受けて下放を経験した人たちなどと話し合う機会を持つことができました。更に私個人の希望で、

南京神学院院長の丁光訓先生御夫妻と、元アメリカYWCA幹事ガークラック女史にも面会することができました。

今回の訪中を、私は実にめぐまれた時期にできたと思います。プロレタリア文化大革命の成果が形をとって現れた時期であり、批林批孔という革命路線闘争のきびしさを生なましく見ることができたからです。

政治面、経済面における革命が達成され、いよいよ文化領域に足をふみ入れたという感じ、批林批孔のきびしさは、工場はいよいよおよばず学校から託児所に至るまで実に徹底的に行われています。こう言うときさぞかし統



閩行の工人（労働者）アパート

制がきびしい暗い生活だろうと思われますが、事実は異なり、人びとは実に明るくゆったりとした生活を送っています。日本では両立がたいこの明るさときびしさがあること

を理解してもらおうのは非常に難しいのですが、肉体労働に対する蔑視や女性蔑視に対する闘いでもあり、平等な社会を願いながらもどこかで自分の特権を行使しようという自分自身の内にもあるふい思想との闘いでもあるわけで、一時張り切ってみても続かなければ意味がないことをふまえているという感じですよ。

教育機関としては、中央民族学院、北京第一実験小学校、上海第二中学校、南京師範学院、五・七幹部学校を見学しましたが、残念ながら一般大学の見学はしませんでした。

日頃差別問題に関心を持っている私には、特に中国のマイノリティーのために建てられた民族学院を見学できたことは幸いでした。圧倒的多数を占める漢民族が権力的にならぬようにと自戒しつつ、一日も早く少数民族が自立しその中から指導者を出すことができるようにと教育しています。

同化ではなく、自民族の言語はもちろん、生活慣習から食事、衣服にいたるまでその文化的伝統を尊重されており、新中国の担い手として一般の理解を深めるためか、各地での

だし物の中にも必ずといってよいほど少数民族の歌や踊が入っていました。

プロレタリア文化大革命以後、特に教育に関しては大きな変化があるようで、学校のシステムはまだ最終的な段階に達していません。学校という機関で学ぶ期間を短縮するという方向ははっきりしていても、目下のところ省段階での統一までで、どこで聞いてもまだ試験段階だとのことでした。

北京で聞いたのは小学校五年制、初級中学三年制、上級中学二年制とのことでしたが、上海では小学校六年生、中学は四年制一本です。小学校は授業料を一期（二学期制）日本円で三百円ほど納めています。大学は無償どころか生活費こみの支給がされています。ただし大学に入るのは容易ではありません。上級中学を出れば知識青年と呼ばれるわけですが、二年ないし三年の生産労働に従事し、その後本人が希望し、職場の仲間が審査し、地域の委員会が批准して大学が受け入れることになっています。政治姿勢はもちろん、日常生活を含めて思想も問われるだろうと思います。



天安門前広場（二〇〇米幅道路）

現在大学は独身者に限られているので、結婚しても学びたい人はいるはずだと異議をさしはさんだところ、そうした人びとの知的欲求に応えるためには業余学校があるし、通信教育もあるとのことでした。労働は八時間、大学の音楽関係に進学する人たちは労働の余暇にそうした趣味を伸ばしてきた人がほとんどだという話でした。医者の中に女医が多いのが目についたのですが、看護婦から医者になったケースも多く、学歴による資格よりも実践で身につけるものを有効に用いる傾向は強いようです。

学生は労働者農民に奉仕する知識人として訓練されているわけで、知識人は労働者農民に学び、労働者や農民は知識を身につけるという両者の結合に努力がはらわれていました。

肉体労働に対する知的労働の優位性を克服するために、生産労働にたずさわっていない人びとは年に五十日くらい、あるいは週に一回の割合で生産労働につきますが、中学でも大学でも工場や農場を持っていて、現場指導は労働者農民が当たっています。一方工場や地域では週に二回ぐらいの学習会もっていますが、残業が全くありませんので趣味を生かしたり、ボランティアな活動をしたり、割合とりのある生活ができるようです。

定年を迎えた老人が子供たちに昔の生活を語ることで、生きた中国史の教師の役割をはたすということもありますし、ありとあらゆる場所が教室であり、あらゆる人に知識が開放されているという五・七指示はスローガンとしてはなく、たしかに教育が社会全体を通してなされているという感じでした。

しかし、現在の中国では転校とか転職は不可能に近いのではないかと思います。工場労働者が新しい製品をつくる任務を受けて大学で学ぶこともあります。大学を出てももとの職場に帰るのが普通です。見学した工場での数人の大学出の労働者に会いましたが、身に

つけた知識も現場で役立てているわけで、ちよっと見ただけでは誰がそうであるのかわかりません。管理運営の責任をもつ革命委員会のメンバーも選ばれてなっているわけですが、共産党員や大学卒とは限りませんし、エリート風でも吹かそうものなら現場からの批判を受けて下放されるというわけです。見学したメリヤス工場の副主任と上海の新華社通信の主任はそうした経験を持っていることを自分で話しておられました。

二十年来下ることもあっても上ることのない物価、衣・食・住の保証だけでなく老後にも病気にもおびえることなく過ごせる中国人は今、人間解放をめざしてあせらず、確実にその歩みを進めているというのが私の印象です。多くの婦人たちが要職についており、社会的に活躍していますが、それだけの社会的背景をもっているわけで、それをそのまま日本に持ち込んで、男女平等などと叫んでみてもはじまらないのですが、婦人の能力が男性に劣るという古い考えを実践的のうちこわしつつあるといえます。それでもまだ指導者が少ない、名実ともに「天の半分を支える婦

人たち」にしなければという声もしばしば耳にしました。批林批孔のきびしさもそうした復古調への闘いであるのでしょう。



謝水心女史を中心に民族学院の学生たち

確かに日本の生活状態を基準に置いて考えると、電化設備はないし、非常に質素で、不自由と感ずることが多いのではないかと思えます。しかし人間に関する限り未来に向かっていきいきと生きていくように思われます。

先に記した中央民族学院で、詩人であり作家である謝水心女史にお目にかかりました。私が同志社大学の者だと知って、かつて同志社を訪問したことがある。住谷総長も知っている、大変なつかしそうに話しておられました。現在は現役を退いておられますが、少数民族の詩集の刊行などに尽力しておられる様子でした。

二年前までは日本人は入れなかったという南京で次のような言葉を聞きました。

「私たちは一部の日本軍国主義者が中国で行ったことを忘れません。しかし両国の人民は未来に目を向けて、友好の手を結びあつて進もうではありませんか」と。

日中航空協定が結ばれ、平和条約の締結も時間の問題になってきました。地理的に近い両国の人間交流が密にできる日の実現を願わずにはおられません。

(大学宗教主事)